

平成二十八年十一月二十六日 和敬塾シンポジウム

「人生の可能性」

小説家 誉田 龍一先生

誉田（ほんだ）と申します。どうぞ気楽にして聞いてください。今日は「人生の可能性」というテーマです。そういうと、大きな話になると思われるかもしれませんが、しかし、私のいっている「可能性」は、ひと言でいってしまうと、毎日のことなんです。自分の話しながら、これをお話ししていきたいと思います。

まず、自慢話からいきましようか。先ほどのご紹介で、私が小説推理新人賞をとったという話がありました（『消えずの行灯』二〇〇六年）。もしよろしければ書店でもまだ売っていると思うので、ぜひお読みいただければと思うのですが、賞をとったとき私の年齢は四十歳を過ぎていました。今どきは昔とちがいで、六十、七十を過ぎて作家になる人は別に珍しくありません。皆さん長生きされますし、定年退職したあとバリバリ書いて、第二の人生どころ

か、そこから作家になる方もたくさんいらっしゃる時代なんです。ですから、四十歳すぎているからといって、決して遅いわけではない。つまり四十というと、ものすごく歳をとったというわけではないですが、自分では当時「もう四十をすぎたしまったな」と思っていました。

私はそのころ塾に勤めていました。和敬塾のような塾ではなく学習塾ですが、そういうところで子供たちを教える生活してました。それで四十歳を過ぎたとき、何かやってみたいと思ったんです。人間というのは、四十をすぎると少し焦るものなんです。「このままではちよつとまずいな。何かひとつ膨らませたいな」と思いました。では自分に何ができるかと思ったときに、本が好きですから、このことで何か機会があればと思っていたら、カルチャーセンターに小説家になるための講座があつ

たんです。塾の同僚が「小説を書きたいから教室に行く」というので、私も「そこに何かあるのではないかな」と思って、便乗して行ってみました。

そのときは、「書く」というのは微妙な感じでした。やってみたいとは思っていましたが、同僚のような経験はなかった。彼は三十歳手前から新人賞に応募している。私はその時点で経験ゼロです。小学校の作文は書きましたよ。それは別です。でも、「ゼロの状態でも行ってみようかな」と思っています。そこに行っただけです。そこは厳しい教室でした。生徒さんがみんなプロ志望なんです。行ってみてびっくりしました。みんなが「東野圭吾になりたい」「池井戸潤になるぞ」と思っている人ばかりなんです。みんなプロ志望の人ばかりでバリバリ書いて先生に提出して、合評

して、これはダメだとか、これはけつこう行けるとか、がんばりなさいとか、そういった批評を受けている。「まづいな。こんな人たちの中に入ったって、やっていけない」と思いましたね。でも、自分も書かなきゃいけない。せつかく行ったんだし、出さなきゃいけないし、出さないとまったいない。

それでひとつ書いて、ポンと提出したんです。本当に短い、原稿用紙で十枚ぐらいのものでした。それを先生が読んで、最初だから甘くしたのかもかもしれませんが、「うん、なかなかいいよ」と言ってくれたんです。いま読み返すと、全然なかなかよくないですね。どこがよいのかわからない。でも、「なかなかいいよ」と言ってもらって、「これ、ひよつとしていけるんじゃないか？」と勘違いしたんですね。勘違いしたおかげで今があるのかもしれない。それで、教室にがんばって行くようになりました。友達の方は半年でいなくなりました。田舎に帰らなきゃいけないという事情もあったんですが、辞めてしまつて、僕ひとりが残つてやっていたんですね。

ここに、ひとつの可能性があるんですね。

結果的に、彼が声をかけてくれたときについて行ったからよかつたということになります。あくまで結果論ですよ。たまたま行ったら、たまたまなぜか知らないけど褒められた。それもひとつの可能性だと思っんです。なぜかという、提出しないと褒めるも貶すもしてもらえないわけだから。私は、やはり行つたんだから出さなきゃ、ということでも提出しました。道というのはそうやって、自分が思っているのとちがうところで開けたりもするんです。

たとえば就職活動だったら、まず業界を決めますよね。金融業界に行きたいとか、保険業界に行きたいとか、IT系に行きたいとか。それを決めて、そこにむかつて勉強、活動していく。あるいは情報収集していく。それはもちろんすごく大事です。ただ、たぶん二十代とかだとわからないと思うんですが、人生はそれだけでは決まっていけないんです。そのときはつまらなく見えたものが、急に大きくなっていく、ということがあるんです。

作家になつていちばん思つたのは、どの作家さんものすごく努力しているなということ。毎日のように本を読んで、

毎日のように資料を読んで、死にそうになりながら毎日のように書いています。作家というのは自分ひとりでやる商売ですが、それこそ「ひとりブラック企業」ですね。たとえば、朝六時に起きて夜中の十二時まで書く。締め切りの前だったら当たり前ですね。一日実働二十時間、平気でやっていきます。一生懸命やるのは大事ですね。そうしないと、そのうちおいていかれるから。次の瞬間には作家として食べられなくなりません。ひとつのものを努力するのはすごく大事なことです。そこは前提として持つておいてください。ただ、それだけでは決まらない、ということなんです。

先ほど言いましたように、偶然や、ほとんど偶然に近い可能性、そういうものから物事がひらけることがあります。これが今日いちばん言いたかつたんですが、具体的にどうすればいいのか。私の場合は、まぐれあたり、偶然もありました。同僚が誘つてくれて、命じられるままに作品を提出した。そこから始まりました。本当に偶然ですね。そういうまつたくの偶然もあります。が、いちばん大事なのは、普段生活しているときに「なるべくアンテナを立ててお

く」ということなんです。皆さんも普段生活していますね。生活しながら、街を歩きながら、学校に行きながら、会社員の方は会社に行きながら。和敬塾に帰って友達としゃべっているとき、テレビを見ているとき、スマホをやっているとき。こういうときに、アンテナを必ず張るんです。それをおすすめしたいと思います。

みなさんよくご存じの小説にトラベルミステリー「十津川警部シリーズ」があります。西村京太郎先生の作品です。この方は推理小説のプロ中のプロです。八十を超えられていまだに現役なんです。小説は読んだことがなくても、同シリーズのドラマをテレビで見たことが必ずあると思います。

その西村先生の話で、おもしろい話がひとつあるんです。トラベルミステリーだから、地方に取材に行くわけです。取材のとき、出版社の編集者がついていきます。二人でタクシーを一日雇って、あそこ行って、ここまわってと、観光地をいろいろまわるんです。二人で一生懸命まわって、写真を撮って、旅館に戻ってきて、「今日はご苦労さんでした」と一杯飲んだりごはんを食

べたりする。そのときに西村先生が、「そういういえば、三番目に行ったところのお姉さんがきれいだったね」と言う。編集者は「え？ え？」と言うんですね。「五番目のところにいたあの怖い男ね、その人がこう言ったでしょ？」と言う。つまり、西村先生にしか見えてないものがたくさんあるんですよ。編集者は「え？ きれいなお姉さん？ 怖いおじさん？」といって、何のこともだかわからない。一緒に同じところをまわっているんですが。

そこなんです。つまり、アンテナを張って歩いていると、普通には見えないことでも見えてくる。ちよつと「歩いていて何か見えてやろう」と気をつけるだけで、知らないものが見えてくる。つまり、同じ道を歩いたのに、西村先生には見えないものが見える。一緒にいる人は見えていません。この差はものすごく出てくると思うんです。

具体的にどうするか。要は自分の人生にとって重要になるであろうことは、実は意外にそのへんに転がっているということなんです。そんな特別なところへ行く必要はない。南極の奥に行かなきゃ秘宝にたど

りつけないとか、そういうことじゃないんです。和敬塾を一步出て、目白通りを歩いてみるだけで、皆さんのほしいものが見つかる可能性も大きいんです。

こう言うと、「そんなことないよ。俺は毎日歩いているけど、見るところなんか何も無いよ」と言われるんですが、それは「ま言った編集者の歩き方しかしていない。目白駅に行くとき、ただ移動するためだけに歩いていけば、何も入ってきません。ところが、ひよつとしたら遅刻するかもしれないけど、何かを見ながら行くと、いろいろなこと気づくんなんです。

たとえば私なんか、前に目白通りを歩いたのは三十年も前なので、今日見たら風景が激変しているわけです。だから今日はいろいろと見ながら、思いだしながら来たんです。たとえば田中（角栄）邸は、学生時代はものすごく大きかったんですが、今は半分ぐらいになっています。日本女子大も変わりましたね。そうやって、普通にぼーっと歩いてくると、ちよつと何かを見てやろうと思ってくるのでは、だいたいちがってきます。

だから、歩くときは「歩きスマホはやめ

「ましよう」ということなんです。スマホは家でやればいいんです。ダメとは言いません。すばらしいコンテンツがいろいろ入っているし、何か調べるときにいいですから。ただ、歩くときにスマホをやっているのは、ちよつともつたないかもしれない。スマホの画面を見るのはいつでもできるのに、画面を見ていて見落とした部分があるかもしれない。ひよつとしたら、田中角栄邸の位置さえわかっている人がいるかもしれない。極論ですが、そういうことなんです。

何かきっかけになるものはそのへんに転がっています。これをチャンスという言い方をしましょう。チャンスはそのへんに転がっているんですが、見えないんです。見えていても見えていないということなんです。あるいは、そこにあっても無視してしまつた。そういうことはすぐあります。ちよつとでいいですから、朝起きてから夜寝るまでに私の言っていたことを思いだしてみてください。きょう目白に着くまでよく見てみようと思つたら、何かあるかもしれない。心がけひとつなんです。ですから、自分のメインのものは必ず何

かみつてください。メインのものといつても、仕事もありますし、学生だったら勉強もある。そのときそのときで変わりますよ。ね。これがおもしろいから研究しようとか、ドラマを見ておもしろかったから歴史を調べてみようとか、あるいはもつとロングパンで、あそこの会社に入ればこれをしつかりやらなければいけないから俺はこれをちゃんとやろうとか、何でもけつこうです。ひとつ決めてほしいんです。これがひとつ決まっている人は、アンテナが自然に立ちます。そうすると、目白駅まで歩いていくあいだに、これに関して引つかることが必ず出てきます。

あくまでも、メインのものは自分で持つていなければなりません。それをしつかり持っているうちは、いろいろなものが出てくる。いちばん大事なことは今までどおりやればいいんです。一生懸命やっていることをひとつでも持つておいて、その道のプロになろうとか、何でもけつこうです。そうすると、自然にアンテナが立ちます。アンテナを立たせるためには、やりたいことをはつきりさせるのが大事なんです。偶然に出てくるものと、自主的にやるものと、

お互いが補佐しあう感じ。一方をしつかりやると、もう一方が出てくる。一方が見えてくると、もう一方がうまくいく。お互いが助けあうんです。

こういうことを言うと、「そうは言っても菅田さん、やつぱり菅田さんはラッキーですよ」とおっしゃいます。そのとおりかもしれません。ラッキーかもしれません。運かもしれません。しかし、結局、運はそういったところからしか出ないと思うんです。もちろん、まったくの運というのはあるでしょう。運の強い人もいれば、運の弱い人もいるかもしれない。だけど結局そこじゃなくて、運を拾うための「最初の段階」がないと、目の前にヒントがあつてもたぶん見逃すんです。一生見ないんです。一生そのままです。運をつかむためには、ラッキーをつかむためには、網を張っていないといけないんです。

話はずれてくるんですが、作家さんの場合はさらに「次の段階」があります。私もそうやって網を張って、なんとかアイディアをみつけて、幸い新人賞をとれたんですが、まさか同じアイディアでずっとやっているとわけてありません。ひとつのネタで

一生は行けないですよ。新しいネタを仕入れるか何かしなきゃいけない。常に追いかけている。次はこれをやりたいから調べようと思つて決めるんですが、だんだん枯渇してきます。作家さんを見てみると、毎回同じことを書いているという人も正直いますよね。私もあまり人のことは言えないかもしれないですが。そうならないためにも、別のアイデアの浮かび方を知っておかなければならない。

いちばん良い方法をいみましょうか。まったく知らない新しいアイデアをどんどん思いつくのに、楽な方法はありませんが、ひよつとしたらここに行けばうまくいくかもしれない場所があります。そこはどこか。

今はそうでもないのかな。美容院、あるいは床屋です。そういうところへ行ってください。今は千円カットでパンと切っちゃうかもしれませんが、普通の昔の美容院とか床屋、ああいうところに行くんですよ。待ち時間がありますよね。待っているあいだ何をしますか。雑誌をおいてありますよね。読みますよね。あれがチャンスなんです。

何がチャンスなのか。そのとき、自分が一生読まないような雑誌を手にとつてください。男性なら、例えば女性セブンとか。わかりますか？ 自分の好きな本をとつちゃダメです。「この漫画大好き」とか、そういうのはダメ。それは家で読めばいいじゃないですか。まったく知らないような雑誌を手にとるんです。そうすると、めちゃくちゃおもしろいです。今日は女性の方もいらつしやいますが、男性の方が多いので男性中心にいますが、男性が女性のように雑誌を読んだら本当におもしろいですよ。だって、いつも見ているものとちがうものばかりですもの。他の人には「あいつ変だ」と思われるかもしれないですが、それはしょうがない。そこからヒントが生まれるんです。

たとえば、女性の服装の話なんか、われわれは知らないことが多いですね。髪留めなんかシユシユというんですか、よく知らないですね。女性セブンに載っているのは芸能人の記事がわりと多いんですが、皆さんの中には芸能人に詳しい方もいらつしやるかもしれないですが、僕なんかは知らないです。内容は不倫がどうか彼女が

どうしたとか、そういう話が多くて、普段あまり味わえない話がたつぷり楽しめます。漫画でも、自分が読んでいない漫画を読みましよう。自分に合わないから、つまらないかもしれないですよ。少女漫画なんか読んでも、あまりおもしろくないかもしれない。でも、そういうところから、ぽろつとアイデアが出てくることがあります。

有名な例がひとつありまして、東野圭吾さんがエッセイに書いています。「とにかく、人から何か誘われたときに、興味が無いとは絶対言うな」と。自分がまったく興味のないもの、たとえば俳句の会に行きませんかと言われても、「いやあ」とか言っちゃダメなんです。だからこそ行くんですよ。「興味がないことをして人生を損していませんか」という人もいるみたいですが、ちがいます。東野さんの場合はバレエでした。バレエに連れていかれたとき、東野さんは「まったく知らないし、興味もないし」と思っていたらおもしろかった。それで本を書いたんですね。バレエの出でくる有名なミステリー小説です（加賀恭一郎シリーズ第二作『眠りの森』）。

何か人生でアイディアにつまったときは、こういうやり方もありませんよ。でも、こういうことを言うと、必ず反発されるんです。「それちよつとちがうんじゃないですか」という方がいらっしやる。「自分が好きなことを一生懸命やればいいじゃないですか。好きなことをやらないとおもしろくないじゃないですか。野球をすごく好きな人は野球を見にいくだろうし、野球は全然おもしろくないと思ってる人は見たって時間のムダだし、人生のムダじゃないですか」。必ずこう言う人がいます。ですが、心がけだけでも持つておくんです。なぜかという、心配しなくても好きなことは自分でいくらでもやるんです。野球が好きだと野球ばかり見ているんですよ。サッカー好きはサッカーばかり見ているんですよ。心配しなくても人間は好きなことはやります。人間はそれくらい自堕落ですから。好きなことをやめろといったって、なかなかやめられませぬよ。好きじゃないことを少しだけやるように心がけておくと、あるいは自分の興味のないことに興味をもつことをちよつとでも心がけておくと、そこから新しいことが生ま

れるんです。

十回に一回でもいいですよ。東野さんは「毎行け」と言っていますけどね。ガールフレンドや男友達から「行かない？」と誘われたときに、「ちよつとおもしろいから行ってみようか」、むしろ「おもしろくなさそうだからこそ、行ってみようか」「知らないから行ってみようか」。これはアリなんです。そこからアイディアがぼこぼこ出てきます。作家さんなんて、見ているとそんな人が多いですよ。このあいだまで何も知らなかった人が、あることをきっかけに好きになって、ぶわーっと勉強して、しゃあしゃあと一冊の本を出してベストセラーになるということがあります。「なんだおまえ、それは俺のほうを知っていたじゃないか」と思いますけども。

でも、これはわれわれの商売だけじゃないんですよ。皆さんだって、生きているうちにいろいろな場面に出会います。会社員や学生をやっているときに、ひとつのことだけやっているのも大事なんですが、どこかでアイディアが枯渇するんです。アイディアは作家だけのものじゃないですよ。学生さんも、アイディアがほしいときはた

くさんありませんか？ 社会人として働いている方は、何歳になっても、どういう場面になっても、「どうしたらいいんだろかな？」というのは毎日のことですよ。これはアイディアがほしいわけなんです。そういうとき、あまりひとつのことを突き詰めすぎず、横にあることをポツとやったら、そこからアイディアをもってこれるということがあります。

だから、自分の好きなことを追求してほしいのと同時に、「何かつまったときの必殺技は美容院」と覚えておいてくれればいいです。今日から昼飯に定食屋に入ったら、何回も読んでいる漫画を手にとるのはやめて、たまには女性用のものを読んでみるというようなことをしてみてください。けっこうおもしろいです。

要は、何かひとつのことをやる。一生懸命やると、自然とアンテナが立つてくる。アンテナによって見えてくるものがある。それから、何か新規のものがほしいときには、あえて自分の知らないもの、嫌いなもの、ちよつと目をむけてみる。そこから何か出てくるかもしれない。それだけでも気をつけていると、人生というのはすごくひ

ろがっていくと思います。

私がそういうと、「本当かな？」と思う方もたくさんいらっしゃると思います。これはむしろ理科系の方がよくおわかりになるのではないでしょうか。昔から理科系で発明・発見をされる方というのは、これに似た過程があることが多いです。リンゴの落ちるのを見て、ニュートンが引力を発見したとか、そういうのはありますよね。現代の最先端、ノーベル賞をとるような研究でも、失敗から発見したという話が多いですよ。たまたま入れすぎたら、何かちがう反応が起こったとか。だいたい失敗や偶然ですね。

結局のところ、ムダなことというのはないんですよ。ですから、自分が知らないところに行ってみる。それをムダと考えずに、少し余裕をもってやると、その次の自分がおもしろくなります。ひよっとしたら、その業界でトップになるかもしれない。

私はときどきこういう講演をさせていただくんですが、このあいだ講演したときに八十五歳の方がいらっしやいました。元防衛省職員で、いわゆる昔の国I（国家公務員I種）、官僚さんでした。定年退職し

たあと、いま何をやっているかというところ、古文書なんです。六十五歳過ぎて古文書を読みはじめたんですね。そこから始めて、その方はいま古文書界の大物になっているんです。名前はここでは言いませんが、名前を聞いたなら古文書界では誰もが知っている、「ああ、あの先生か」というようなお名前です。六十五歳から始めて、十年経った七十五歳ぐらいから常にトップを走っておられます。もともとの職業とまったく関係ない分野でしょう。最初になぜ始めたんですかと訊くと、やはり彼も偶然なんです。始めた理由は、自分の奥さんが先に行きだしたんだそうです。奥さんが古文書を読む講座から帰ってきたあと、「こんなもの読めるか。おもしろくないから私もうやめるわ」と言って、テキストを放りだしたそうです。「なんだ情けないな。俺が読んでやろう」と思って彼が見たら、まったく読めないんです。「こりゃいかんな。よし、俺が読めるようになってくる」と思って通いはじめたんです。だから、奥さんが行ってテキストを投げだしてないかと、始まっていないんです。

本当に、ムダなことはないですね。自分

のやりたいことをどんどんやるのもけっこうですが、何かを拾いあげていくのも大事なんです。拾いあげていくことによって、おもしろいものが生まれてくる。学生の皆さんはお若いですよ。これから、すごくたくさんチャンスがあると思うんです。チャンスはそのへんに落ちていきます。通りすぎてしまうこともあるでしょうが、少しでも多く拾っていくと、何かが残ると思います。

学生の皆さんは、これから職業を決めることになると思います。どこかの企業に就職します。そこで働いてがんばらなければいけません。これは間違いないです。でも、いま私が言ったようなこともやってください。あとで方向転換しようとしたときに、若い頃にやっておいてよかったと思うことはすごくあります。逆にいえば、四十歳のときに何かしようと思ったときに、やっていないと困ることもあるんです。

たとえば、私の場合、本はたくさん読んでいたんです。その自信だけはあった。本をあまり読んでいなかったら、たぶん小説の講座に誘われても行かなかっただろうし、行ったところでムダだったでしょう。

結局、「可能性をつぶさない」ということなんですね。ひとつの企業に就職しました。ここでがんばります。でも、今の日本は昔の日本とちがいますから、終身雇用ではありません。どんどん転職するかもしれない。自分のやりたいことが出てくるかもしれない。自分が家業を継いで社長としてやっていくということがあるかもしれない。そういうときに、昔やったこととか、昔あれを覚えたとか、そういうことがあると全然ちがうんですよ。だから、学生のうちにやれることはできるだけやっておいたほうがいいです。

誰でもできることだと、自転車でもいいですね。子供のとき自転車に乗りましたよね。そうしたら、四十、五十、六十になって急に乗っても乗れるんです。子供のときに乗れないと、あとで乗っても乗れないですよ。若いときにやっておけば、二十年経っても思いだしてやれるんですね。自分が「これはもう要らないだろう」と思うことでも、ちよつとでも触っておくとすごく楽になります。

専門家、スペシャリストという言葉がありますね。これも大事なんです。ひとつ何

かのスペシャリストになってほしいと思います。ですが、それと同時にジェネラリスト、「何でもオツケー」な人であってほしい。たとえば野球なら、「昔サードやセカンドをやったことがあります。今はショートだけど、どこのポジションでもできます」というほうが、いろいろな意味で自分も得だし、雇用者からしても「それからセカンドをやらせてみようか」となりますよね。そういうことができますので、可能性をつぶさないという意味でも、いろいろなことをやってください。チャンスを拾うようにしていけば、自分の中の可能性が広がります。

学生の皆さんには、私が言っていることはわからないかもしれませんが、私も、若い頃言われてもわかりませんでした。ですが、自分の人生をずっとたどっていると、僕なんかはそんなことばかりです。こういう商売ですから、崖から落ちそうになったときに、たまたま昔やったことのある何かがあったから救われたり、昔ちよつとアンテナを立てておいたことに救われたりすることがすごくあります。とにかく、自分の中に何かひとつでも取り入れていく、とい

うことはやったほうがいいと思います。

そういう意味では、特にわれわれ作家という商売は、すごく因果な商売です。ちよつと言葉は悪いですが、「殺人以外全部やったほうがいい」といわれるんですね。何でもやっておいたほうが、書くときに役に立つ。それからもうひとつ、悲しいことやつらいこと、悔しいことがありますよね。人からボロクソにいわれて情けないとか。そういうことがあったとき、われわれの職業でありがたいのは、落ちこみんだけでも落ちこんだあとに「この今の落ちこみをよく覚えておいて、あとで小説に書こう」と思えるんですね。中には家族が死んで、その悲しさを書く人もいます。「よく覚えておいて、二年ぐらい経って悲しさが引いてきたら冷静に書けるな」とか、作家はそんないやらしいことまで考えています。

でも、皆さんも同じですよ。小説家になりたい方がこの中にいるかどうかわかりませんが、小説家になってもならなくても一緒です。結局、悔しいことをいわれたら、そこでカッとなるよりも、「これはいつかどこかで役に立つな」と思ってスツと意識をずらす。そうすると、気も楽になります。

知り合いのミステリー作家さんの本を読んでいると、まず殺人事件が起こる。殺された人がいますね。被害者のモデルになった人がだいたいわかるんですね(笑)。「この作家さん、この前この人と揉めたから殺したんだな」とか。本当に殺したらえらいことになりますから、紙の上で一生涯懸命殺している。それも作家のいいところですよ(笑)。

皆さんは作家にはならないかもしれないですが、何があっても「絶対これは先に活きるぞ」と思えば、少し楽になるんです。悲しいことでもつらいことでもそうです。典型的な例は、若い人だと失恋とかありますよね。そのときはつらいし悲しいでしょうが、そういう思いをひとつふたつしておくと、「また次に役立つな」と思えます。次が考えられるようになります。別の人ときあつたときにも、「これからあれを言われるぞ」という心がまえができる。バカみたいな話ですが、何か起きたときにムダにはならない。そう思っておくと、楽になりますし、ムダに悲しみすぎることもないし、鬱になったりもしないと思います。作家的な生き方といえましょうか。和敬

塾で講演する方というのは、だいたい一流企業トップに近い、CEOや役員クラスの方が多くでしょうから、私の話はいまぶズレているかもしれません。しかし、こういう生き方もあります。皆さんはよく覚えておいてください。

私も、四十すぎから作家になろうと思いい、たまたま、なることができました。これは運の良し悪しの話をしているのではないんです。四十すぎても、六十すぎても、七十すぎても、道が別のところにひらけるということはあるんです。いま学生さんたちは二十代前半だとすると、四十になるまでにだいぶありますね。六十や八十までは、さらにだいぶあります。それだけの長い時間を何か一本で行くというのは、逆におかしくないですか? 「どこかでちよつとちがうところに行くこともあるんだろうな」と思いますよね。

一本で行く人は一本で行ってください。それは全然いいと思います。ですが、「そのようなこともあるんだ」と思っていたらいて、今から何かをやっておくと、四十のときにえらい役に立つ。六十のときにえらい役に立つ。そういうことです。六十に

なつてから急にあわててはいけません。そういうことで、今からいろいろな可能性の使い方、いろいろな体験の積み重ねをもつておきなさい、ということなんです。

私が自分の人生を振り返ってみると、作家になつてからトントン拍子というわけではありません。いいことも悪いこともたくさんあります。ほとんどの職業はそうだと思いますが、たぶん職業というのはそんなにもしろいことはないんです。

たとえば、先ほど名前をあげた東野圭吾さんや池井潤さんはものすごく売れています。もう大活躍ですよ。では、どういう生活をされているのか。チラシとお話をうかがうと、毎日書いているんですよ。毎日ずっと書いているんですよ。さっき言ったように、朝の八時から夜の十二時ぐらいまで、ずっと書いています。それでちよつと寝るんですね。また起きて、そのあともずっと書いているんですよ。お金のものすごく入ってきますが、もう三年先、四年先、五年先までずっと原稿が詰まっているんですよ。

東野さんは、五年間は休みなしでしょうね。その五年後が来ると、また次の五年後

の原稿が決まっているんですよね。そうやって、七十、八十になったら死んでしまいますね。これまでのいわゆる大作家さんは、松本清張さんも、藤沢周平さんも、司馬遼太郎さんも、だいたいそういう人生です。ずっと書いてずっと書いて、それで死んでしまう。お金持ちではあるかもしれませんが、いい家は買えるかもしれませんが、作家だけではなくどんな職業もそうだと思いますが、そんなにおもしろいことはないんです。

本当にそういう世界なんです。それはどんな職業でもそうです。「お金がたくさん入ったからやめようか」では、やはり一流の人にはなりません。皆さんも何の分野でもいいからぜひ一流になっていただきたいですが、一流の人というのはたぶんやめられないんですよ。「お金が一億貯まったらやめましょう」とか「三億貯まったらいや」とか、そういうふうに決めている人ではないんですよ。もうとにかく書く。とにかくおもしろいものを書くこと。ずっとそれで生きてきて、ずっと書いています。たまたまお金持ちになっても、預金通帳は関係ないんですよ。ずっと書いて

ていて、書きながら死んでいく。一流の人はそういう人が多いです。

友達の作家さんを見ていても、とにかく皆さんひとつのことに没頭します。逆にいえば、世の中のことを知らなかったりしますし、そのことしかできないという方も多いですが、集中心力を見るとやはりプロだなと思う人はたくさんいます。たぶん、そのまま死んでいくんでしょう。定年もないし、あるのは売れなくなつて廃業です。それはいくらでもあります。売れている人はずっとそのままやっていきます。でも、そうやって人生を歩めるとなれば、ある意味すごく幸せなんですよ。

皆さんにはまだ死ぬ話は早いですが、皆さんも何かひとつのことをとにかく一生懸命やっていたください。ブラック企業や過労はいけないと思いますが、自分のやりたいことを一生懸命やっていく。外的な要因からではなくて、内発的な、自分がやりたいと思うことを一生懸命やっていく。それを続けているうちに、何かものになったりします。ブラック企業みたいなものには皆さんには入ってほしくありませんが、ただ、自分がやりたいことならどんどんやれば

いいのではないのでしょうか。こういう言い方はあまりよくないですが、若いうちはムリもききます。それに、若いときは頭の中に知識がよく入るんです。交代してもらいたいぐらいですよ。四十、五十になると、正直いって本を読んでも頭にあまり入ってきません。そのときは読んでいます。本を閉じるでしょう。一日経ったらけっこう忘れていたりするんですよ。たぶん今の皆さんは、読んだらそのまま入ってくるでしょう。若いと定着できるんですね。そこで定着したものは自転車と同じで、三十年後も五十年後もどこかで生きています。だから、今のうちに入れておきましょう、ということなんです。

次は小説家の話をしますが、皆さんの中で小説家になりたいという方はいらっしやいますか？ いませんかね。じゃあ、逆にいいですかね。今のところ、ここには小説家になりたいという人はいない。なりたいと思っていない方も含め全員に言います。文章を書く癖はつけておいてください。「読む」と「書く」は絶対にやっていくください。

書く癖を必ずつけておいたほうがいい

というのは、特に若い人に言いますが、日記でも何でもいいですから、そのとき思ったことややったことを書いておくと、十年、二十年、三十年先に役に立ちます。今はFacebookのようなSNSもありますが、あれはいつ消えるかわかりません。やはり手で書いた日記がいいんです。

なぜこんなことを言うかといいますと、皆さんがいま二十歳とすると、五十歳は三十年先ですよ。五十歳になって三十年前のことを思い出したときに何がいいかという、単にノスタルジーの話ではなく、「あの頃の俺」を思い出すんですよ。「そのとき俺がどういうことをしていたか」を思い出すんです。これはできれば書いたほうがいいです。自分の思っていることを書く。日記といっても、「朝起きて歯を磨いて学校に行って」、そんなことはどうでもいいです。思っていることを書いておくんです。

ひよっとしたら、二十年後の自分は何か不甲斐ない思いをしているかもしれません。そのときに奮い立たせてくれるんです。毎日とはいわなくても、その時点で思っていることを記録しておいてください。文章

にしておくことよって残ります。くだいようですが、ITはいつ消えてしまうかわからなくて怖いですから、紙に残しておいてください。

なぜこんなことを言うかという、私はほとんどしてこなかったんです。たまたま大学四年の頃、和敬塾にいた頃の学生手帳にちよつと書いておいたことがあって、それだけが残っています。一年間の半分ぐらいでした。それだけを見ても、ものすごく刺激を受けたんです。その後、二十代は全然そういうことはせず、三十代、四十代からは続けています。

結局、自分の歴史を自分が見るといことが大事なんです。人に見せるものではないですよ。人に見せて「俺は若い頃こんなことを考えていたんだ」なんて言ったつてしようがないですから。ただ己のために役に立ちます。今からでもけっこうです。ある程度お年を召された方も、今からでもけっこうです。書いてください。そうすると、おもしろいことがあります。

それから、二つ目。皆さんは小説家にはならないとおっしゃいました。でも、ひよっとしたら私みたいな人が出てくる

かもしれない。私もたぶん学生の頃客席にいたら、「小説家になりたい人？」といわれても「はあ」という感じで座っていました。皆さんは、小説家にならないとしたら何になりますか。たとえば企業に入りまします。企業に入っているいろいろなことをやっていきます。将来、社長になるかもしれない。CEOになるかもしれない。あるいは、何かスペシャリストになって独立して、コンサルタントになって、その業界ではあの人のところに行けばいいという人になるかもしれない。そうすると、書いてくださいという話が来るかもしれません。これは冗談でいっているのではなく、どんな方でもずつと一生懸命生きていけば、その分野の「プロ」なんです。いま出版業界にビジネス本という分野がありますが、これはものすごくたくさん刊行されています。要するに、ある企業でずつとやってきた人のノウハウを知りたいわけです。本を書く話は急に来る可能性があります。「それは来たときの話でいいじゃないか」と思うかもしれないですが、そこで書ける人と書けない人の差がものすごく出るんですね。本にならなくても、「ちよつと書類で教えてください

「これ書いて送ってください」とか、いくらでもあります。このときに、ものが書けるか書けないかというのはすごく大事です。私も、えらくなった友達にビジネス本をもらうことがあるので読むんですが、ときどき読んでいると何を書いてあるかわからないことがあるんです。最初は「俺がバカなんだ」「この業界のことがわからないから」とか思っていたんですが、どうもちがうんですね。内容がわからないんじゃないかって、文章が何いつているかわからないんです。

そういう意味でも、ものを書くということとはすごく大事です。書くという行為によつて、まず自分の考えがまとまるんですよ。毎日ではなくても書いていけば、すぐまとまっていけます。

あと、これはよくいわれるんですが、今の人はパソコンで文章を打ちますね。ひよつとしたらスマホですか。パソコン、キーボードを打つのは、すごく体にいいらしいです。画家が長生きするのと同じですね。指を動かすことでいい影響があるんです。

ですから、書く癖をつけて悪いことはあ

りません。わかりませんよ、ひよつとしたら三十代四十代になって大作家になって、「昔、菅田とかいうのが、何か変なことを言っていたな」と思いかもしれない。「あのとき俺は手を挙げなかつたけど、今は作家になって、池井戸潤さんより上だからな」とかいうことになっているかもしれないですよ。

要は、書くということをお自分の中にとりこんでおく。もちろん本を出すときにも楽ですが、それ以上に自分の考えがまとまっていける。自分のことがはっきりしていく。

それを人前にさらすことができる。ですから、書いてまとめていく、ということをや、皆さんにできるだけおすすめていきます。

それからもうひとつ言っておきたい。読むんです。作家になるとか関係なしに、読んでください。いま読書量が減っているといえますね。私はそれは信じていません。なぜかというところ、その代わり皆さんはスマホでいろいろなものを見ているですよ。ゲームだと読書とはいわないかもしれないですが、少なくとも Yahoo! のニュースだとかああいうのを読んでいるかもしれない。それからちょっと Google で検索し

てそれを読みますよね。そういう読書というのを、必ずやってほしいんです。

当たり前のことなんです。読むということはずいことなんです。あれをやる人はバカですよ。なぜバカか。ものすごく頭がよくて、ものすごく世界に通用している、何十年と研究してきた大先生が一生懸命書いたものを、一時間か何かで全部読めるんですよ。パクれるんですよ。世の中にこんなにおいしい話はあまりありません。書くほうは、下手したら一生涯つきこんで一作という人もいますよ。それを手にとつて、一時間、二時間、三時間ぐらいで読んでしまつて、「ああ、おもしろかった」と言つて閉じてしまふんです。しかも大事なものは、いま生きていない人のものもいくらでも読めるということなんです。千年前とか五百年前とかの作品、源氏物語とかもそうですが、そんなものが読めるんですよ。ちよつと想像してみてください。やらないのはバカです。

たとえば、失恋のことでなんでも友達に相談しますね。そのお友達がどれだけ大した人なのかもしれませんが、友達の意見もいいですが、本に訊いたほうがいいです。

もうものすごくたくさん、しかもものすごく立派な解決法が、いろいろと載っています。ですから、皆さんも何か悩んだときは、人に訊くというのもいいですが、「本に訊く」というのがいちばんいいです。ただ、悩んでいるときに、必要な本をみつければむずかしいかもしれない。だから、日ごろからたくさん本を読んでおいて、「ああ、今の俺の状態って、あのとき読んでこの小説のこれじゃないか」「いま迷っているこれは、あの歴史書のあるところに書いてあったな」というふうにすれば、役に立っています。

本を読むということは、そういうことなんです。こういう言い方は年寄りくさいんですが、先人、しかも超一流の人が残したものをタダで——いやタダじゃないです、本代を払ってくださいね。ともかく、超一流の人が残したものをわずかなお金でいただけるということ。それは実は、すごいことなんです。だから、それをしないのは、もったいないことをしているなあと思うんです。

本といっても、いろいろあるでしょう。スマホで読む、タブレットで読む、Kindle

で読む。何でも構いませんから、読んでください。それによって、何か自分が困ったときに「あのとき読んでこれだ」ということになるんですね。

あと、これはちよつといやらしい話なんです。歴史小説をたくさん読んでおくといいです。企業のトップや取締役といったクラスの人には、そのジャンルがめちゃくちゃ好きなんです。たとえば、司馬遼太郎の『坂の上の雲』か『竜馬がゆく』のどちらかを読んでおくんです。両方で十巻ぐらいいありますが、それを両方とも読んでおくだけで、たいがいの政治家、企業、財界トップの方々はいたい話をしてくれまます。その二つだけでも充分です。皆さん、それを読んでいるんです。何がいかとうと、話ができるんです。お話しできる機会があったとして、何を話します？ TP P Pの話をするんですか？ むこうのほうの立場が上ですし、詰まりますよね。政治の話はしますか？ トランプ大統領の話はしますか？ それもいいかもしれないですが、ちよつと歴史小説の話をすれば、好きな方が多いですから。司馬遼太郎でも、『竜馬派』と『坂の上の雲派』がいるんで

すが、たいていどちらかが好きなんです。九割方の政治家がそうです。政治家のアンケートを見たことがあります。本当にそうなんです。ですから、私みたいな若輩者でも、「文章を書いています」という話をする、トップが「私は司馬遼太郎が好きです」とお話されます。「私も竜馬のこういう本を書いていますよ」といって竜馬の話をしたりする。そうすると話が通じてきて、他の話にもなったりする。それでメールを交換したりする。ちよつといやらしい話ですが、こういう人脈づくりにも、歴史小説を読んでいるといいことがあります。特に若い人で『坂の上の雲』の話ができます。特に若い人で『坂の上の雲』の話ができていすると、ビックリされるんです。でもすごく喜ばれます。わたしも「ああ、若い人にこういうのを読んでくれていてる方がいるんだ」と思うと、自分の中にもフレッシュキョウが出てきますからね。ですから、歴史小説をたっぷり読んでおくのをおすすめします。

とにかく、読んでください。書いてください。別に作家にならなくてけっこうです。から、そういうことを貯めていく。日記みたいなものを貯めていくことによって、自

分の人生を振り返ることができません。振り返ったときに、それが自分を叱咤してくれます。「若いときはこんなに一生懸命やろうと思ったのに、今の俺なんか」ということになるかもしれない。あるいは逆に、「若いときはバカだったなあ」と思うかもしれない。それもひとつの人生なんです。そうやって自分しか読まないものを書いておくんです。自分しか読まなくていいんです。大事なものは他人ではなく自分でしよう？ 自分のために書いておくんだから、書けると思います。やってみてください。自分のためだけにというと利己的な感じですが、自分しか読めないものを書くというのは最高のことです。読んで、書いて、自分を高めていってほしい。

これぐらいで話を終わります。固い話ばかりで申しわけありませんでしたが、若い人を前にすると、「これは言っておかないとまずい」という感じがします。そういう意味では、自分は残念な青春を送ったわけです。あまりはじめにやっていたいなかったというか、遊んでばかりいたというか、和敬塾の中でもどちらかというと勉強していないほうだったと思います。それじゃいけないという話をしたかったんですね。口うるさいオッサンみたいになったかもしれない。

とにかく、可能性というのはものすごくいっぱいあります。皆さん、少なくとも絶対に自分で可能性を消しちゃダメですよ。アンテナを立てて、ひとつでもふたつでも、可能性を拾うんです。そのへんに落ちていきますから。拾っておくんです。今は使わなくても、ポケットの中に入れておくんです。二十年后、三十年後に、いきなりポンと出てくるかもしれません。絶対に「あのとき、あれをやっておいてよかった」と思えます。逆に、「あのときあれを拾っておけばよかったのに」となると嫌ですよ。残念ながら時間は戻りませんからね。そういうことも、がんばってやっていくといいと思います。

どうもありがとうございます。(拍手)

■ 質疑応答

● 質問 (南寮・上川君)

南寮三年の上川です(誉田先生「私も南寮でした」)。ありがとうございます。

最近悩みがありまして、すべてのことに対してあまりやる気が起きないというか、面倒くさいなと思ってしまうことが多いです。先輩に勧められて『いつも「面倒くさい」と思ってしまうあなたへ』という「本を読むのすら面倒くさいと思うあなたに勧めたい一冊」みたいな本を読んだんですが、読んでもあまり腑に落ちません。「そもそもやる気を起こそうとかいう考えがちがう」「やりたいとか、全部好きなように思えばいい」というようなことが書いてあったんですが、あまりしっくりこないです。いま先生からお話があった「アンテナを張る」とかそういうことも、話を聞いたばかりのときは「ぜひやってみよう」と思っていますが、あまり持続しないうです。

■ 回答

やる気がないと。私なんかも典型ですよ。今も締め切りを抱えているんですが、締め切りまで一週間ぐらいあると、もうやらないですよ。「今日はいいい。今日は飲みに行く約束がある」「明日はパーティーがある」「今日は調子が悪い」。それで、最後は泣きながら書いている。

つまり何が言いたいかというと、「どこかに無理をつくりなさい」ということです。そうでなければ、だらけてしまうんですよ。しようがないんですよ。みんなたぶんそうです。世の中の人を放っておいたら、たぶんみんな家から出ないです。飯食ってそのまま横になってテレビを見ているだけで暮らしが成り立つならば、みんなそう思うんです。けどしませんよね。

ですから上川君は、無理にでもする何かをつくって見たらどうですか。しようがないからやるんです。何でもいいから、自分に強制するということを、ひとつでもふたつでもやっていくと、何かひらけてくると思います。もしやれない日があっても、「今日はやれなかったな」と思ってやめるのではなく、明日またやる。

今は大学に通われていると思うんですが、たとえば就職して会社に行くとなったら、朝何時に出勤して、夜はかなり遅い時間まで働く、その間そんなことは言っていないかもしれませんが。他人に無理強いはいけません。自分が無理強いはできません。ですから、自分に無理強いというか、無理をさせてみたらどうですかね。たぶん無理

のきく体でしょうからね。そういうことをやっている、自然に起き上がってくるものもあると思いますよ。

私なんかもそうしていますね。本当は、締め切り二日前とか三日前にあわてて書くようなことはやっちゃいけないんですが。そんなことをやっているとうまくいかないですから、無理強いをしたほうがいい。

●質問（乾寮・伊藤君）

お話ありがとうございます。塾の先生をなさっていたそうですが、どうして始められたんですか？

■回答

大学するとき、和敬塾にいたときですが、アルバイトでやっていたんです。やっているうちに経営者という話をして、卒業したらそこに行くという話になりました。好きでしたし、その頃は教育産業はビジネスとして見込みがありました。今は少子化の時代になりましたが、その頃はそういう感覚もあって、こういうことをやっていけばおもしろいかなと思ったのがきっかけですね。

●質問（南寮・三戸君）

先ほど、先生はムダなことはないとおっしゃいました。和敬塾はけっこうムダなことが多いと思うんですが（先生笑）、そういう経験で今になって活かされたということはありますか。

■回答

私のような職業にとっては、和敬塾にいたことはすごくありがたいですよ。つまり、ある人たちと、24時間とはいわないまでも一緒に暮らしているわけですね。こういう体験というのは、家族は別ですが、他の人とはできませんよね。一生の中でこういうことは、ないまま終わる人は多いですよ。家族以外の人とずっと寝食をともにして暮らす経験は、あまりできません。

何がよかったかというと、本当にいろいろな人を見られたんですよ。われわれ作家というのは、人間を書かなきゃいけないんです。たとえば家族だけだと、親がいて子供がいて、その数人しかいない。でも、和敬塾にいた四年間だけでも、いろいろな人、いつてもみんな大学生ですが、たくさん

の人を見られました。同じ大学生でも、これほどのバリエーションがあるのかと思いましたが、当時は単にそれだけ思っていました。小説を書くようになると、またちがうふうに思うようになりました。私は時代小説を書いているんですが、江戸時代でも結局、今と同じようにいろいろな人がいたわけです。和敬塾の経験のおかげで、いろいろなパターンの人を思い浮かべることができます。ですから、それはすごくありがたかったです。

それから、人間を観察するというのはいやらしい言い方ですが、一緒に暮らしているといいのは、会社や学校だけの友達よりも、一歩奥に入ったところが見られることです。ひよっとしたら、距離が近すぎて揉めたりすることもあるんでしょうが、本音に近い部分まで見られる機会は、おそらく世の中にあまりないですね。

あまりないことを四年間もやらせていただいたのは、作家になるんですしたら最高の場所だったと思います。私は今からでも入塾したいです。入塾して、大学生の皆さんの暮らしとかを知りたいですね。大学生の暮らしの小説を書いてみたいぐらいで

す。そう思うぐらい、和敬塾での暮らしはすばらしい経験だったと思います。

●司会

誉田先生、どうもありがとうございます。（拍手）